

補習と心理サポート



補習クラス

今年もレバノン国内の7か所のキャンプで、小学校低学年生を対象とした補習クラスを続けています。最近ではパレスチナ難民キャンプでも6割の子どもが幼稚園に行くようになっていますが、残り4割の幼稚園に行かなかった子どもたちは、レバノンの国定教科書やカリキュラムが非常に難しいため、小学校入学の最初からつまづくこととなります。それでも辛抱強い補習クラスの指導員のおかげで、95%の子どもたちが無事に進級できるようになりました。また補習クラスを終えた4年生以上の子どもたちを追跡調査したところ、9割近くが無事に中学生になっていました。

昨年、指導員たちが何カ月もかけて作成した500ページの指導用教材も活用されています。作成にかかわったメンバーはとてもやる気と誇りを感じていて、新しいスタッフたちにも良い影響が出ていました。夏休み中は新1年生向けのクラスも開講します。

1000人近い子どもたちの未来に関わる補習事業ですが、今年度は資金助成がなくなってしまい、資金的な困難が予想されます。皆さまのご支援を重ねてお願い申し上げます。

雨の中を進む

レバノンでの協力団体「子どもの家」は、5か所の難民キャンプでトラウマや発達障害、精神疾患などを抱えた子どもと家族が、レバノン人の児童精神科医や臨床心理士などか



ら診療や治療を受けられるセンターを開設しています。レバノン戦争から30年の今年、同センターが5月にベイルートで開催した「復元力とメンタルヘルス」というテーマの会議に参加して、東北とパレスチナでの活動について報告をしました。多くの参加者が東北被災地の方々に共感を持ってくれていることを実感しました。

会議には、ヨルダン川西岸やガザからも専門家が参加。また北欧や米国の専門家も参加し、昨年夏ノルウェー・ウトヤ島での大量殺人事件の遺族や生存者のケアについて、また米国でのアラブ移民の精神状態についてなど20近い発表がありました。

パレスチナでの臨床経験の長いフランス人専門家は、大きなショックや悲劇から回復しようとしている人々を「雨に濡れても前に進む」と表現し、病気になった原因を追究するよりも、様々な問題を抱えているのに前向きなのはなぜか？というアプローチの方が有効であると述べました。興味深いことに、この考えの最初の提唱者はアウシュビッツ強制収容所から生還した女性たちを研究した米国のユダヤ系の学者だということです。

中東では子どもたちが紛争などに晒されているにもかかわらず、家族

や地域社会などの日常的な生活の枠組みが維持され、教育や将来の職業について関心を集中することで、現実との調和が図れているというレバノン人専門家の指摘もありました。

パレスチナ難民キャンプで、難民となった「ナクバ（アラビア語で破局）」の経験が祖父母から孫の世代に語り継がれること、また集団的な試練として記憶が受け継がれることが帰属感を強め、厳しい生活やトラウマに対する適応や支えとして機能しているという研究報告もありました。

自分の将来を自分で決めることができないパレスチナ人ではあっても、自分たちの状況を的確に理解し、できることを考え、それを自分でコントロールするといったことを通して、厳しい状況を生きていく力を作っていけるということでしょう。会議のあとで訪れたワーベル・キャンプでは、小学生たちがナクバの歴史を学び、それに対する意見や絵を1枚の大きな紙に思い思いに描いていました。厳しい状況を生き延びるための知識と経験に裏打ちされているプログラムなのだと改めて感じました。

